

序

高齢化を背景として循環器疾患をもつ患者が近年増加しており、循環器薬を処方する機会が増えています。大病院に勤務する循環器専門医は別として、一般臨床医あるいは若手医師においては、日々の臨床で循環器薬の使い方に悩まれている医師が意外に多くいます。そこで、循環器薬の使い方を丁寧に解説した入門書を企画しました。このような書籍は他にもいくつか発行されていますが、本書は専門外あるいは若手医師にとって日常臨床のバイブルとなるように、多くの工夫が凝らされています。

本書は「薬剤編」と「疾患編」の2部構成とし、基本の薬剤情報から患者に合わせた処方まで学べる実践書をめざしました。どの項目も最新の診療ガイドラインに準拠して、エビデンスに基づき簡潔に解説しています。各項目で体裁を統一し視覚的にも読みやすいように構成されています。本書の特徴として「薬剤編」では“同種薬の薬理作用の違い”や“主な副作用（発現頻度別）”，「疾患編」では“うまくいかなかった場合の裏ワザ”，“やってはいけない不適切処方”といったような項目を設け、聞きたくても聞けなかった内容が随所に記載されています。さらに日常臨床でよく遭遇する症例をCase Studyとして1～2パターンとりあげることで、病態に応じた具体的な投与方法も呈示することにしました。頭を悩ませることが多い重複疾患の解説もこのCase Studyで解説しました。このように、皆さんが知りたかった臨床上のポイントとコツを本音で伝える書籍をめざしました。

また、本書は困ったときに直ぐに取り出してチェックできるようにポケットに挿入できるサイズとしました。難解な薬物動態やメカニズムに特化した記載や図をなくして、臨床に直結した内容を表としてまとめ、統一性のある紙面構成で分かりやすく表示しました。

本書が読者の皆さんの循環器診療にとって、欠かすことのできないハンドブックとなれば企画編集した者として本望です。

2020年3月

池田隆徳